教皇ボニファティウス８世

倉　田　　稔

目次

はじめに　　ピエトロ　　教皇ケレスティヌス５世　　ナポリ
カステル・ヌオヴォ　　ナポリ王　　ガエターニ　　ボニファティウス８世
ジョット　　ダンテ　　対フィリップ４世　　ベネディクトゥス11世
クレメンス５世　　神聖ローマ帝国　　むすび

はじめに

イタリア・ルネッサンスの，主にその前史について，かつて，論文「イタリア・ルネサンスの遠因とサンタ・マリア・ノヴェッラ寺院」（『人文研究』138・139輯　2020年３月）で, ほんの少し述べたが, ここでも他の面から入って見る。特にボニファティウス８世についてふれる。ただし彼のこの時代はルネッサンスではない。彼は実に興味深い思想を持っていた。

ボニファティウス８世は，ローマでコロンナ家と争い，フランスとはフィリップ４世と争い, ナポリの国王の力を排除し, フィレンツェを取ろうとし, ジョットを重用し，ダンテに憎まれた。

ピエトロ

教皇ケレスティヌス５世（1209-10－1296，在位 1294.7.5-12.13，５ヶ月）は，教皇としては珍しく，良い人で，まじめだった。本名はピエトロといった。姓は，当時普通であるように，彼が庶民だから，ない。ナポリ王国のモ

ローネ山にすみ，そのためダ・モローネという。イタリア出身で，修道士である。

彼は小作農の子として生まれた。若くしてベネディクト派[1]の修道士となった。禁欲主義を貫き，司祭，修道院長などを歴任した。その後，苦行，隠遁の生活に入り，修道会を創設した。同会は，貧者や病因の世話をした。彼は病気を奇蹟的に治して有名になった。

人生の最後で，隠遁生活をし，修道会を作った。山中の陰者で，清貧の人だった。多数の信奉者がいた。無垢で善良な好人物だった。修道士としては有徳だった。あまりラテン語はできなかったとされるが，どうか。

教皇ケレスティヌス５世

時の教皇ニコラス４世が1292年に没し，ペルージャで1293年からコンクラーベ（教皇選出会議）が1294年まで続き，教皇が決まらなかった。２年半も選出されなかった。コロンナ家[2]とオルシーニ家[3]の利害対立で長引いたのだった。そこでピエトロ・ダ・モローネは手紙を書き，選出を促した。この手紙の主はわからなかった。しかしピエトロだと思われた。この時，１人の枢機卿がこのピエトロを推挙し，彼を教皇にしようとしたのだった。それが決まってしまった。ピエトロは逃げ回ったが，無理矢理，即位させられた。ナポリ王の代弁者たちと，枢機卿たちから選ばれた２人の枢機卿らが，高い山からピエトロを連れてきた。こうして教皇ケレスティヌス５世となった。彼は84-5才であった。８月29日，即位式・戴冠式がローマの北，ラキウの町で行われた。彼は北イタリアに行った事がなかった。この新教皇を，ナポリ王（後述）はナポリに留め置いた。新教皇もローマには行かないと言った。ナポリのカステル・ヌオヴォに王座を置いた。枢機卿ガエターニはナポリには行かないと言ったが，従った。まさか教皇に反対するわけにはゆかなかった。ローマに教皇の玉座がないというのは珍しいことである。国王カルロ２世はケレスティヌス新教皇と親しかった。そして新教皇を傀儡にした。フラ

ンス人を多く枢機卿にした。国王はフランス出だったからでもある。身近な同士，修業者が，新教皇の周りにいた。教皇庁であれば，その行政，財政，政治の一切を取り仕切らねばならないが，ケレスティヌス５世にはその気がなく，また力量もなかった。彼は業務の一切を無視し，放り出した。実入りのいい聖職禄を求める者たちが殺到し，彼はよく分からずに与えてしまった。結局カルロ国王が力をもってしまった。

清く正しく貧しいだけというのは，困りものであり，貧しければ清い。彼は宴会などしない。なにも付けないだけのパンが好きだった。教皇になるには政治力が必要である。

ナポリ

B.C. 7 世紀ころ，ギリシャ人が建設したネアポリスがナポリの起源である。その後，多くのギリシャ都市がイタリアで作られた。紀元前202年に南イタリア全体がローマ国の支配下に入った。79年にヴェスヴィオ山の大噴火が起きている。476年に西ローマ帝国が滅亡した。その後，５世紀に，ヴァンダル族とゴート族が侵入する。東ゴート族が493年からイタリアを支配する。535年から，ビザンツ軍がイタリア半島で東ゴート族と戦う。つまり東ローマ英国のユスティニアヌス帝の再征服を受けた。

その後，568年にランゴバルト族が南イタリアを領有する。661年にナポリは公国となる。9 世紀初から中ばにイスラム教徒がイタリア南部を侵攻する。

1139年にナポリはノルマン人のシチリア王に降伏する。1140年にノルマン人に支配され，ノルマン王ルッジェーロ２世がナポリ湾に卵城を作り，要塞とした。ルッジェーロ２世のあとをグリエルモ１世らがついだが，その後シチリア王家で子孫が途絶え，1194年にホーエンシュタウフェン家のハインリヒ６世・シチリア王に支配された。1198年には同家のフェデリコ２世に継承され支配された。フェデリコ２世は1224年にナポリ大学を作った。役人養成のためだった。

1250年にフェデリコ２世が病没し，これでホーエンシュタウフェン家が断絶し，フランスのシャルル・ダンジュー[4]が1266－68年に南イタリアとシチリア王位を取った。つまりローマ教皇クレメンス４世によりシチリア王に封ぜられ，そして戦争により南イタリアを手に入れた。彼は首都をパレルモからナポリに移した。ここからナポリ王国と呼ばれるようになった。アンジュー家が来た時，1282年に古いカステル・ヌオーヴォが着工された。５年で竣工した。この1282年にシチリアの晩鐘事件でアンジュー家はシチリアを失い，ナポリだけを支配した。1284年，アラゴン王ペドロ３世がシチリアを取る。シチリア王国は２つに別れたわけだ。ナポリでは1309年に，３代目ロベルトがナポリ王になった。[5]

カステル・ヌオヴォ

ナポリには４つ城がある。１つは，卵城（カプアーナ城）であった。12世紀にノルマン朝によって建造され，サンタ・ルチア港の突端に立つ。次は，13世紀にアンジュウ家によって建てられたカステル・ヌオヴォ（Castel Nuovo）であり，「新しい城」の意味である。フランスから来てナポリを治めたシャルル・ダンジュウにより1279年に王宮として建てられた。これが新城となり，息子のナポリ王シャルル２世（カルロ，在位 1285－1309）から王宮として使われた。城内にパラティーナ礼拝堂が作られた。現在に較べれば小さな古い城であった。1282年に竣工した。

だが1442年，アラゴン家が来て大規模に改修した。これは５つの塔からなる。アラゴン家の勝利を称えた凱旋門のレリーフがある。新しいカステル・ヌオーヴォは，現在見る物である。そして，教皇ケレスティヌス５世やガエターニの時代にはまだない。

このカルロ２世の時代だった。カステル・ヌオーヴォの小さな城にカルロ２世は住んでいたのだが，ここに新教皇も住む事になった。ケレスティヌス５世は，古い時代のこの城の大広間に木の部屋をつくって生活した。だが教

皇として勤まるかどうかの，自信がなかった。膨大な業務を，分からないと言って，無視した。演芸会や饗宴もなくなった。ローマ教皇というのは，国王のような政治をするのだが，もちろんケレスティヌス５世には，そんな才覚はなかったし，そのつもりもなかった。カルロ２世はフランス人を多数枢機卿にした。

ナポリ王

12世紀，シチリア王国（シチリアと南イタリア）は[(6)]ホーエンシュタウフェン家の神聖ローマ帝国に移った。だがこれが断絶し，フランスのシャルル・ダンジュウ（在位　シチリア王　1266－82，ナポリ王　1282－85年）が新しく支配した。ローマ教皇クレマンス４世は，1266年にシチリア王国をシャルル・ダンジュウに与え，アンジュウ家は首都をシチリアのパレルモからナポリに移した。しかしシチリアの晩鐘事件でシチリアに反乱が起き，アラゴン（スペインの大きな州）王がシチリアを支配した。南イタリアは，アンジュウ家が支配していたので，王国（シチリアと南イタリア）は２つに分裂した。

カルロ２世（二代目シャルル２世，在位 1288または9－1309年）は，父がカルロ１世（シャルル・ダンジュウ）であり，父と共にシチリアを追われた。アラゴン王と戦うも，敗れ，捕虜になる。1288年，シチリア放棄の条件でカルロ２世は釈放され，父の跡を継いでナポリ王になった。またシチリア王アラゴン家と戦うが，勝てなかった。そこで娘たちを結婚させて近づいた。1289年にシチリア王になった。1309年，ナポリで死す，３男ロベルト（３代目ロベール王，在位 1309－43年）がナポリ王位を継いだ。

ガエターニ

枢機卿ベネデット・ガエターニ（Gaetani，カエターニと書かれているものもあり），は，ローマ近郊アナーニ生まれの人で，出世したかった。アナー

ニの名門貴族・ガエターニ伯の子だった。彼は教会法を学んだ。1276年，ローマ教皇庁へ入った。教皇特使にもなる。彼は通風と胆石に悩んだ。彼は教皇になりたかった。

ガエターニは，1281年に枢機卿になり，教皇選出の会議に出席していた。そして教皇になりたかったが，なれず，ケレスティヌスつまり，ピエトロ・ダ・モローネがなってしまった。普通だったら自分がなれるはずであった。

ガエターニは，カステル・ヌオーヴォの教皇室に密かに伝声管を壁に備えた。そして毎夜，カエターニは寝ている新教皇にささやくのだった。「余は汝のもとへ遣わされた天使だが，いと慈悲深き神にかわって汝に命ず。ただちに教皇職を辞し，隠者の生活に戻れ」。ケレスティヌスは，毎晩この声を聞き，苦悩しだした。だいたい自分でも教皇が勤まらないことが分かってきた。それは初めから分かってもいた。そこで教皇を辞めたくなってきた。教皇官房のカエターニに相談し，辞任の方法を教わった。カエターニは教会法は得意だし，ケレスティヌスを辞めさせたいから，すぐその方法を教えた。こうして12月に彼は辞任した。教皇が生前に辞任するとは，歴史始まって以来初めてのことであった。

ローマ教皇は，この時代になると，国王，政治家，時には将軍としての能力をもたねばならなかった。清く貧しくというだけの人では勤まらないのであった。

ボニファティウス８世　c.1235－1303

新しくカエターニがボニファティウス８世（在位 1294－1303），132代教皇，になった。この教皇選出はナポリで行われた。

ガエターニは有能な外交家で，政治家であった。諸国に聖職禄を持ち，野心に満ちた俗の人で，土地と金を追い求め，増やした。教皇になるため，多くの枢機卿を味方に付けた。中部イタリアの土地を買い占め，聖職売買をし，同族を登用した。

彼は，1281年に枢機卿となり，1294年に教皇になった。贅沢，美女が好きで，良心がなく，世俗が好きだった。死後の世界を信じない，地獄と天国はこの世にあり，と考える。耄碌，病苦，性的不能などが地獄で，若さ，健康，美女・美童が天国，と思う。また彼は両刀使いだ。キリストも役に立たない，と。彼はあらゆる種類の大罪を実行した。大食，貪欲と贅沢，賭博，不信心だった。迷信を信じた。

彼は，カルロ２世が教皇庁に送り込んだ人物を罷免し，教皇宮をナポリからローマに移した。

ボニファティウス８世は，信徒が反抗すると怖いので，モローネ山に逃げた前教皇を逮捕し，フモーネ城の地下牢に入れた。後に彼は病死する。

ボニファティウス８世は，前教皇の任命者は否認した。全ヨーロッパの政治に介入した。まずシチリア島の奪回をねらった。アラゴンのハイメ２世が事実上ここを統治していのだった。ローマのコロンナ家がボニファティウス８世の反対派となった。そこでコロンナ家を破門し，戦いとなったが，コロンナ家はフランスとシチリアに亡命した。

ボニファティウス８世は教皇至上主義だ。フランスが教会にも課税をしはじめ，彼に反対した。ボニファティウス８世は1300年を聖年とし，祭典をし，ヨーロッパの全聖職者がローマ巡礼をせよと強制した。200万人がやってきた。ローマ教会の財政が潤った。彼の思いつきだった。

ボニファティウス８世はフィレンツェの支配を狙う。教皇派の内紛が起き，白と黒に別れた。彼はその対立を扇動した。白派は３人の最高行政府を作り，ダンテ・アリギエーリはその１人に選ばれた。ボニファティウスはフィレンツェに100人の兵を出すよう命じた。ダンテは反対する。1301年，ダンテは教皇に会う。しかし帰りの途上，永久追放される。ダンテは，「神曲」で，ボニファティウスを，地獄に落ち，逆さにされ，生き埋めにされ，焼かれるとした。

ボニファティウスは，1300年，教皇勅書を出し，聴罪や祭儀にかんする特典を廃止し，ローマ教皇庁の財政を豊かにした。ヨーロッパ中から純レ宇社

がやってきた。

フランシスコ会[7]などの特典が失なわれた。彼はフランシスコ会の清貧主義を断罪していた。

ボニファティウス８世は，現実主義者で，良心の痛みを感じない。最後の神の審判はない，と信じる。恐れない。天国と地獄はない，死後世界，イエスを信じない。この世にある。男女とも愛した。贅沢，博打好き，華美・美食を好んだ。金銀の宝飾品を着用した。賭博が好きで，教皇庁がカジノの様になった。性は奔放だ。

処女懐胎，ミサの儀式は，だましだと。

ある神父がイエスの助けを祈っていたら，ボニファティウスは,「あほう，イエスはただの人, 自分を救えなかった男が他人を助けられない」と言った。それはそうで, イエスは死刑の判決を受けて静かに死んでいったわけである。

「女や男と寝ることなど，右手と左手で手もみをすることと同じようなものだ。」「それだけのことだ。何が不道徳なものか！」[8] 彼は，肉絶ちの日に肉を食べた。アラゴンからの使節はいう,「多くの枢機卿たちは彼の死を望み，その非道にはうんざりしている。」

彼は罪悪をすべて実行した。大食で，貪欲と贅沢，妖術を信じた。賭博をし，権力が好きで，不信心だった。[9] 教会はすべてのものの主人だ，と。王権に対しても。

彼は聖年祭を挙行した。ヨーロッパ中から巡礼がくる，そして賽銭を集める。

彼は思う。死後の生などない。地獄の恐怖は，民衆を震え上がらせ，教会に服従させるためだ。処女懐胎など笑い話だ。と。きわめて現実的で正しく認識していた。

当時の観察者はいう「ローマ宮廷は飽くことを知らない，その貪欲は底なしである。ある限りの貢ぎ物を持ってゆかねばならなかった」。

ボニファティウス８世は, ヨーロッパの政治が金を生む樹であると知った。

イタリア国内ではむきだしの荒稼ぎをした。聖職売買，同族登用，この２つは教皇と教会のすることだから問題ない，と。中部イタリアの土地を買い占め始めた。コロンナ家と対立した。破門し，戦いを挑んだ。コロンナ家の土地をほとんど奪った。コロンナ家はフランスへ逃れた。フィリップ４世がかくまった。

彼も，多くの教皇と同じく，ネポティズム，つまり自分の門閥を身びいきした。彼はシチリアを取り戻そうとした。ただし彼は学問の造詣が深く，1303年，ローマ大学を作り，ジョットらのパトロンになる。

ボニファティウス８世は。それでも，淫乱さと不道徳の点では，ヨハネス12世（在位 955－963）には及ばない。(10)

ジョット　1267－1337

ある時，ボニファティウス８世は，全国で絵のうまい人を探して，ローマ教皇庁で召し抱えようした。募集人がフィレンツェにきて，ジョット（Giotto de Bondone, c.1266-1337）に会った。そして絵を描いてくれるよういい，それを法王の下に持参し，判断すると言った。ジョットは，やおら筆を一本もちだし，紙に円を１つ書いた。これは完全な円である，これをもってゆけ，分かる人は分かると言った。募集人はボニファティウス８世のもとに帰り，これを見せた。教皇は，この円だけを見て分かり，びっくりして，すぐジョットを採用した。(11)

ジョットはイタリア・ゴチック最大の画家である。教皇のそばで立派な仕事をした。

彼はおそらくロマニャーノかロミニャーノにうまれた。

フィレンツェに画家チマブーエがいて，盛名をはせた。彼はあるときフィレンツェの郊外を馬ででかけた。偶然１人の羊飼いの少年に出会った。彼は石に羊の絵を描いていた。チマブーエ先生はその絵を見て，あまりにうまいのでびっくりし，弟子にしたいと思った。その子はジョットといい，その家

に入り，父親にジョットを弟子に取りたいと言った。父も，ただの農民になるよりいいかもしれないと了承した。こうしてジョットは，チマブーエの弟子になった。（ヴァザーリ）ただし，実際はジョットが生まれてすぐ，華族はフィレンツェに移ったらしい。ジョットは，ジョット・ディ・ボンドーネといわれるが，ボンドーネは父の名である。チマブーエの弟子ではないという説もある。ある時，チマブーエが出かけて，ジョットはいたずらで蠅の絵を壁に描いた。チマブーエ先生は。帰ってきてその蠅を追い払おうとした。蠅が動かないので，もう一度，手で払おうとした。また動かないのでよく見たら，絵だった。ただしチマブーエの弟子だった時代の話は伝説であろう，と。

その後，前述のように，ジョットは教皇庁で働くようになった。

ジョットはナポリのロベルト１世に呼ばれてナポリに数年滞在し1333年までいたことがある。ボッカチオ(12)やサケッティ(13)と友人になった。フィレンツェのサンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂(14)の横に立つジョットの鐘楼を設計したが，建設途中に亡くなっている。工匠頭に1334年に任命され，亡くなったので，他の設計家が二階部分以上をひき継いだ。大聖堂ができたのは100年後である。

彼を有名にしたのは，アッシジのサン・フランチェスコ寺の「聖フランチェスコの生涯と事績」シリーズ，その他である。またピサのサン・フランチェスコ寺の板絵「聖フランチェスコ」を画いた。しかしこれには彼が描いたものではないという疑義がよせられている。

彼の有名な作品は，パドワのスクロヴェーニ礼拝堂(15)の連作「キリストの生涯」「ヨアキム伝・マリア伝」(16)であり，1305年に完成した。「荘厳の生母」（ウフィーツイ美術館蔵），サンタ・マリア・ノヴェッラ教会の絵画群，例えば「十字架上のキリスト」が有名である。「ユダの接吻」「聖フランチェスコ伝　小鳥への説教」「聖フランチェスコ伝」「聖フランチェスコの葬儀」「ステファネスキ祭壇画」（バチカン）。「磔刑像」（フィレンツェ，ノヴェラ教会）。「受胎告知の聖母」（バディーアの礼拝堂，フィレンツェ），キリストの生涯の５つの情景，（サン・ピエトロ寺院），聖器安置室の板絵，（サン・

ピエトロ寺院）がある。

彼はイタリア中で仕事する。すべてジョットから始まり，ジョットは天才だった，とヴァザーリは書く。[17]

ただしボニファティウス８世死後，クレメンス５世に従ってアヴィニヨンへ行き，仕事をし，その後，イタリアへ帰った，そして多くのイタリアの都市に呼ばれて仕事をした。

ジョットの絵の題材は宗教だが，風景や当時の人物画も描いた。自然を生き生きと描いた。ダンテと友人になった。彼の像をかいたことがある。非常に多くの仕事をし，イタリア中で活躍した。フィレンツェで愛された。ボッカチオもジョットを褒めている。「デカメロン」で数カ所，６日第５話でである。ジョットはゴチック期の人である。妻シウタとの間に８人以上の子を持った。

14世紀はジョットの時代である。彼はルネサンス人にとって重要な画家だった。ジョットはビザンチン絵画からイタリア・ゴチックへ代えた。[18] ジョットの絵画の良い面を発展させたのがマサッチョ[19]であり，彼はルネサンス絵画の先駆者とされる。

ダンテ

ボニファティウス８世は，イタリアを入手しようと，まずフィレンツエ支配をねらった。フィレンツエは政争にあった。白派と黒派であった。共にグエルフィ党（教皇党）であって，黒派は教皇権を強く認め，白派はそれほど認めなかったし，教皇の愛誠への関与を認めなかった。ボニファティウス８世は，フィレンツェの白黒闘争に介入し，白派を倒す。ダンテ・アリギエーリは白派の幹部だった。黒派の首領，貴族ドナーティは教皇と協議した。そしてフィレンツエの闘いは発展し，かつ発展させられた。教皇がそこへ，フランス軍によって和平の使者を送った。ドナーティが政権をえた。白派が処刑された。

ダンテ（1265－1321）は白党の立場を説明するため，外交使節の一員としてローマに派遣された。ボニファティウス８世はフィレンツェをフランスに侵攻させ，白派を追放した。ダンテも，ローマからの帰途に追放と財産没収を通告され，フィレンツェに戻れば死刑と宣告され，彼は一生放浪するのである。こうしてダンテはボニファティウス８世を憎むのである。ダンテは『神曲』の中で，ボニファティウスを地獄に落とし，さんざん非難するのである。[20] ただし彼は『神曲』中でボニファティウスをひどく描いても大丈夫かと，友人に聞いたのだが。1321年にダンテはラヴェンナで死す。

対フィリップ４世

フィリップ４世は，美公と言われた。彼はアラゴンと戦った。ナポリ王カルロ２世への義理立てであった。この戦いは1291年に終結させた。

ボニファティウス教皇はフランスの国王フィリップ４世（1268－1315，在位 1285－1314）と対決する。フィリップ４世（カペー家）は経済的に豊かなフランドルを奪おうとした，フランドルとの戦争で，戦費をフランスでキリスト教会にも課した。これでボニファティウス８世とフィリップ４世が激しく対立した。フランスで王の腹心，宰相，ギョーム・ド・ノガレが秘密会議を主催した。対ボニファティウス対策であった。

フィリップ４世はローマ教皇庁への献金を停止した。またテンプル騎士団の財産を狙い，弾圧・解散させた。

ボニファティウス８世はフランスの教会税がとれなくなり，苦しくなったので，1300年に聖年祭を行い，儲けた。彼の発案であった。ヨーロッパ中から，僧侶や巡礼者がローマに集まったからである。

フィリップ４世は1302年に三部会を造るのだった。ボニファティウス８世は教皇勅書を発表し，教皇の首位権を明らかにし，教皇に従属しない者は救済されないとした。

ボニファチウス８世はフィリップ４世を破門した。反対に，フィリップ４

世はボニファティウス８世を捕縛しようとする。

ボニファティウス８世はフランスのフィリップ４世を敵にしてしまう。

ローマ貴族のコロンナ家は，有力な枢機卿を出していた家だが，ボニファティウス８世に反感を抱いていた。コロンナ家の当主シアーラは，追われてフランスにかくまわれていた。フランスの大学教授で，フィリップの腹心で，宰相のノガレが，1303年，シアーラと共に，教皇離宮のアナーニを襲撃した。教皇の顔を殴り，冠と，祭服を奪い，３日間監禁した。これが有名な「ボニファチウス８世の捕縛」であり，「アナーニ事件」と呼ばれる。「カノッサの屈辱」と並ぶ事件である。だが教皇はアナーニ市民に救われ，ローマ帰還はできた。翌10月，病死した。「憤死」といわれたが，自然死だった。

ベネディクトゥス11世

ボニファティウス８世の死後，ベネディクトゥス11世がローマ教皇に選出された。在位 1303－04年で，かつ８ヶ月という短い在位期間であるため，記述が飛ばされがちである。彼はしかし，フィリップに抵抗し，フランスに移らなかった。毒殺されたと云われる。すくなくとも急死した。

クレメンス５世

その後，次のクレメンス５世は，南フランスのアビニヨンに1308年に行き，1309年に教皇庁が移転した。フィリップ４世が教皇座をアヴィニヨンにもって行ったのだ。クレメンス５世はボルドーの大司教で，フィリップ４世の影響下にあった。教皇庁のアビニオン時代が始まる。教会はフランスに支配された。教皇庁，そして神聖ローマ帝国は強い時と弱い時があり，この時は弱かった。

また教皇は普通はイタリア人であるが，そうでない時も少しある。フィリップ４世は，官僚制を作り，絶対王制へ向かおうとした。[21] クレメンス５世は，

フィリップ４世にそそのかされ，テンプル騎士団を迫害する[22]。

神聖ローマ帝国

1273年に神聖ローマ帝国皇帝が復活した。４百年の間，ヨーロッパでは神聖ローマ帝国皇帝が存在し，しかし100年間皇帝がいなかった。1273年にハプスブルクのルドルフ１世（在位 1273－1291）が皇帝に選ばれたのである。こうして俗界は統一された。しかし，ルドルフの統治は東欧において強かったのであり，フランスやイタリアには力が及ばなかった。彼は戴冠のためにローマに来ても良かったのだが，来る余裕がなかった。

ボニファティウス８世の時代に神聖ローマ帝国皇帝は，ナッサウ家のアドルフ（在位 1290－8）と次いでハプスブルク家のアルプレヒト１世（1298－1308）であった。前者は，ルドルフの次の皇帝であった。

むすび

ボニファティウス８世は，キリスト教をリアルに捉えた。これほどのとらえ方をして，表現した教皇はいない。勿論，純なキリスト教徒からすれば，とんでもないこと，冒涜である。だが，実は正しい。

注

(1)　529年，ベネディクトゥスがローマ・ナポリ間のモンテ・カシーノに修道院を創立した。服従，清貧，純潔をモットーとした。黒い修道服を着た。修道会としては一番古い。
(2)　中世ローマの有力貴族。オルシーニ家とライバル関係にあった。ローマの覇権を争った。オルシーニ家はローマ教皇を３人出した。
(3)　中世ローマの有力貴族。コロンナ家とライバル関係にあった。ローマの覇権を争った。コロンナ家はローマ教皇を１人出した。枢機卿になった者も多い。特にアビニヨン捕囚の時期に争った。
(4)　シャルル・ダンジューは，アンジュウ家のシャルル，イタリアではカルロ。

シチリア王はカルロ１世（1227－1285，在位 1266－1285），その息子がナポリ王シャルル・ダンジュウ，つまりカルロ２世である。在位 1285－1309年。

⑸　『イタリア史』；小森谷『ナポリと南イタリアを歩く』新潮社　2011年

⑹　高山博『中世シチリア王国』講談社現代文庫。

⑺　13世紀，イタリアのフランチェスコ（1182－1226）によって始められた修道会，狭義の会は1209年に成立した。無所有と清貧に基づいた。托鉢修道会である。彼はアッシジに生まれ，父は豊かな商人だった。父と対立し，家を出て，修道士になる。存命中から聖人視された。托鉢僧になる。清貧と平和，を主張し，学問は不要とした。アッシジに本部がある。同じくドミニコ会修道派は学問を重視した。

⑻　堀田善衛，88ページ

⑼　モンタネッリ，ジェルヴァーゾ『ルネサンスの歴史』上，中公文庫　昭和60年，33－40ページ

⑽　スチュアート，p.94－95。

ヨハネス12世　130代（955－964）はひどい放蕩者で，修道院では「彼が早く天に召されるように」と祈りが捧げられた。彼は大聖堂で売春宿を経営し，それを愛人に任せた。サン・ピエトロ大聖堂から金の聖杯を持ちだし愛人たちに与えた。１人の枢機卿の目をつぶし，１人を虚勢してかつ死なせた。博打をし，異教の神に願をかけた。女性たちは教皇が出没するような所には近づかないよう警告された。彼はいつも新しい女性を口説き落とそうと徘徊していたからである。あまりひどいので，さすが本人も暗殺を恐れて，サン・ピエトロ寺院から貴重品を奪ってローマ近郊に逃げた。そこで緊急の教会会議が開かれ，皇帝オットー１世はヨハネスを退位させることにした。964年，ヨハネス12世は，ある既婚婦人と不義を通じて，その最中，怒った亭主が彼の頭を槌でたたき割った。

⑾　ヴァザーリ『画家・彫刻家・建築家列伝』；『ジョット』東京書籍　1990年

⑿　デカメロンの作者。一時期，ナポリにいた。前作で少し書いたので，省略。

⒀　フィレンツェの人，フランコ・サケッティ『ルネッサンス巷談集』を書く。

⒁　フィレンツェの大司教座聖堂であり，1296年から140年余をかけて建てられた。ドゥオーモ（大聖堂），サン・ジョヴァンニ洗礼堂，鐘楼の３つからなる。後期ゴシックと初期ルネッサンスを代表する建築。身廊とドームが初期ルネッサンスであり，ドームはブルネレスキが作った。（参考）『サンタ・マリア・デル・フィオーレ』Firenze。カーニョ書。

⒂　渡辺晋輔『ジョットとスクロヴェーニ礼拝堂』小学館　2005年。

⒃　ヨアキムはマリアの父，マリアの母はアンナである。イエスの，この祖父母が描かれる。彼らの話は『黄金伝説』（ヤコブス・デ・ウォラギネ編，平凡社，４冊本）にある。

⒄　『ルネサンス画人伝』上，白水社。

⒅　ベローシ『ジョット』東京書籍：ビストーティ『ジョット』京都書院。

⒆　マサッチョ（1401－1428）。フィレンツェ共和国内に生まれた，短命の天才画家だった。

⒇　ダンテ『神曲』。ダンテについて，前作で少し述べたので，省略。

(21)　アンドレ・モーロワ『フランス史』上，新潮社，85－90ページ。

(22)　ルイス，p.126．ページ以下。

参考文献

ヴァザーリ『ルネッサンス画人伝』白水社
堀田善衛「ある法王の生涯」(『聖者の行進』ちくま書房　1986年)
　堀田善衛（1918-1998)，小説家・評論家
マックスウエル・シュチュアート『ローマ教皇歴代誌』創文社　1999年　p.159－162
鶴岡『教科書では学べない世界史のディープな人々』中経出版　2012年
モンタネッリ他「ボニファティウス８世」(『ルネサンスの歴史』上，中公文庫
　1985年)
Pope Boniface 8, in: Catholic Encyclopedia,
P. Dupuy, Histoire du Diff'erend d'entre le Pope Boniface VIII et Philippe le Bel,
　Paris
ブレンダ・ラルス・ルイス『ローマ教皇史』原書房，p.44　など。
Naples. A District Guide. Artejm 2010
井上幸治編『南欧史』山川出版社
北原敦編『イタリア史』山川出版社
澤井重雄『ナポリの肖像』中公新書　2001年
ガブリエッラ・ディ・カーニョ『大聖堂　洗礼堂と鐘楼』Firenze 2001

　ボニファティウス８世には，３つ，像と絵がある。１，ヴァチカンの胸像は，アルノルフォ・ディ・ラポの作。２，フィレンツェの像は，アルノルフォ・ディ・カンビオの作。ドウオーモ付属美術館。３，ラテラノ宮に，ジョットのフレスコ画「聖年を宣言するボニファティウス８世」1300年。その後，アルフォンス・マリー・アドルフ・ドヌーの絵「教皇ボニファティウス８世の捕縛」。